
橋

結城ひいる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

橋

【Nコード】

N4392S

【作者名】

結城ひいる

【あらすじ】

小さいころからの友達と遊び心で始めた取り換えっこ。僕たち二人の青春は取り換えっこに費やされる。

1 (前書き)

幼馴染の愛ちゃんとおぼく。僕らの遊びは、洋服を取り換えることだった。

僕んちから道路を挟んだ向かいに女の子が住んでいる。僕と同年で、僕が好きな女の子だ。

女の子はいつも、僕に笑いかけてくれる、手を引いて遊びに連れて行ってくれる。僕はいつも愛ちゃんの後ろについて回っていた。

僕は愛ちゃん主催のおままごにもよく混ぜてもらった。同い年の女の子たちはなんだか威圧的で怖かったけど、愛ちゃんが女の子の服を貸してくれたので、皆とも仲良くできた。愛ちゃんは決まってお父さん役だった。僕はお母さん役で、愛ちゃんはおままごの仲で僕のだんなさん。僕の中ではとてもしっくりきていて、居心地がよかった。

僕はもともと線が細く、なんだかひ弱で男子の遊びについていけないかった。だから、いつも愛ちゃんと遊んでいた。そういえばあの利根川の土手は今もあのままだろうか。利根川は僕と愛ちゃんの家から徒歩3分の距離にあり、幼少のころの僕たちの遊び場だった。シチュエーションを愛ちゃんが決めて二人で物語を作っていく、よく人形を持って行って、映画にも劣らぬ大スペクタクルを演じていた。いつもヒーローは愛ちゃんがやって、僕は、男の子か、ヒロインの役立った。いつも愛ちゃんに守ってもらう役で僕は、まるで僕自身のことだとも思った。

小学生になってもしばらく遊びは変わらなかつたおままごとの延長の物語り作り。僕と愛ちゃんは学童に入っていたけど、よく二人で抜け出して、僕のうちで着せ替えごっこをした。ママのクローゼットにはいつも僕たちが満足するだけの服が入っていた。ママはクローゼットを荒らしても怒らないし、一度着た服は着ないからクロー

ゼットは物置同然だったから。愛ちゃんは僕よりかは大きかったけどママの服を着るとぶかぶかで袖と丈がいつも余っていた、でもその端正な容姿はそれすらも味方につけ、愛ちゃんの着せ替えは美しかった。

僕ははじめは愛ちゃんの着せ替えを見ているばかりだったけど、愛ちゃんに自分が見合うようになりたくて、パパの服を着るようになった。ぶかぶかのシャツに、かた結びのネクタイで愛ちゃんの相手役をした。でもいつも愛ちゃんに「千尋くんにはそんなの似合わない」といわれた。でも僕は自分の格好に満足していた。鏡で見ると確かにちんちくりんだったけど、普通の服よりかは愛ちゃんの装いに似合っていたから。でも愛ちゃんは次に僕んちに来るとき自分のお下がりを持ってきた。愛ちゃんに着るように言われ僕はその服に袖を通す。少しきつかったけど何とか入った。愛ちゃんはお下がりを着た僕を見て満面の笑みを浮かべた。「これからは遊ぶときそういう格好をして」と愛ちゃんが僕に耳打ちする。僕は愛ちゃんが喜んでくれたのがうれしくて、愛ちゃんの言葉を鵜呑みにした。愛ちゃんはお母さんの長いドレスのすそを引きずりながら僕の周りを一周し、僕をよく見て、自分のお下がりが僕に小さすぎることに気が付いた。僕と愛ちゃんの身長はほとんど同じになっていた。

僕は愛ちゃんの服を着るようになった。愛ちゃんの服からは、いつも愛ちゃん家の洗剤と愛ちゃんのおいがする。愛ちゃんは自分の服を着て僕と並んで歩くのを面白がっていたが、それに飽きたのか僕の服を着てみたいと言い出した。僕の服はお母さんがよくわからないブランドから衝動買いたしたものばかりで、子供らしくないデザインのものが多かった。僕はそれがあまり気に入らず、お父さんに買ってもらった服ばかり着ていた。愛ちゃんはお母さんが買った僕の服を見ると、たいそう興奮したように「素敵な服！どうしてこれを着ないの？」と僕に投げかけた。僕はその問いには答えず、「愛ち

やんが着ていいよ。」といった。僕の服を着た愛ちゃんは本当に美しかった。黒サリエルパンツにすこしフリルの付いた薄紫のＴシャツ、それにふわふわの黒いジャケットを羽織ると本当に貴族の少年みたいだった。ショートボブの髪と色素が少し薄い茶色で切れ長の目すつと通った鼻筋と薄い唇、その少し冷ややかな顔立ちに、僕の服は本当によく似合った。愛ちゃんは鏡で自分の服装をよくチェックすると満足げには鼻を鳴らした。そして僕に振り返ると「どう？」と僕の目を見つめていった。ぼくは、しどろもどろに感想を述べる。「シックな色使いと愛ちゃんの顔と雰囲気、その・・・とてもあつてると思うよ。」愛ちゃんは僕の返答を聞き満足げにうなづく、僕のほうを向いて考え込むようなポーズをとった。「でも、私がこんな格好をするなら、私の服では千尋くんにはもつたいないわ。」と愛ちゃんが少しくたびれた自分の服を着る僕を見ていった。

僕はその夜お母さんに、愛ちゃんが僕の服を着るから僕に、それに見合う服が欲しい。と話した。お母さんは、なら貴方も私が買った服を着ればいいじゃない。といった。僕はお母さんに笑われるのを覚悟で女の子の服が欲しいと言った。お母さんは笑った。

次の日愛ちゃんが家に来て僕の服を着て僕は愛ちゃんの服をきて、また遊んだ。そこにたまたまお母さんが帰ってきた。僕は着替えるまもなく、お母さんにこの姿を見られたくなかったので、上の階に逃げようとしたが、愛ちゃんは僕の手をつかむと玄関まで駆け出した。帰ってきて僕の服を着た愛ちゃんと、愛ちゃんの服を着た僕を見てお母さんは、とてもびっくりしていたけれど、僕たちをまじまじと眺めると、僕に向かって「そんな素敵な少年にエスコートされるなら、もっと素敵な服を着なくちゃ！」と笑顔で言った。

お母さんは自分のクローゼットから一度来た服をたくさん持ってきて糸をはずしていった、そして愛ちゃんの服を型にどんどンドレスを切っていく。ミシンを取り出し勢いよく縫う、僕たちはその作業

をじつと見ていた。時折愛ちゃんの方を見るとその目はかがやいている様に見えた。

お母さんは10時間ぐらいぶっ通しでミシンをかけ続け深夜になって僕に一着のワンピースをくれた。花柄のシルク生地で作られたワンピースは袖がパフスリーブのようになっていて、スカート部分はふんわりと広がっていた、シンプルでありながら美しいドレスだった。お母さんはと愛ちゃんは「早く着てみて」と僕をせかした。僕は繊細なワンピースを破かないように身長に袖に手を通し、後ろのチャックを閉めた。二人の前に出るとお母さんは満足げな笑みを浮かべ、愛ちゃんの目は輝いていた。

お母さんは僕の腕を引っ張ると化粧部屋まで連れて行き、僕に簡単な化粧をして、茶色の髪に少しウェーブのかかったウィッグをかぶせた。ウィッグは少し僕には大きく前髪が目の下までたれていた、お母さんははさみを取り出しすばやく前髪を整え、コテを出して髪の毛を軽いたてまきにした。それが終わると僕と近くで見ていた愛ちゃんの手を引くと衣装部屋に戻り、おきな鏡の前に立たせた。鏡には美しい少年のような愛ちゃんと、優しいピンクのワンピースを纏った茶色の髪の美少女が写った。

まるで貴族のようだと僕は思った。愛ちゃんはこっちを見て僕を上から下まで見回すと、僕のほほにキスをした。

母は僕に月十万円を衣装代としてくれるようになった。母は僕と愛ちゃんに「二人で使いなさい」といった。僕たちは買い物によく出かけるようになった。新宿の服を回ったが、大人物は僕たちの体にはまだ大きすぎた、原宿に行ったときラフォーレの中を上から下まで見て回った。地下はロリータ服やインディーズバンドも含めたCDショップ、色の五月蠅い雑貨屋に、帽子屋、が並んでいた。僕は愛ちゃんに手を引かれメタモルフオーゼという店に入った。スタッフはロリータ嬢、店内にはゴシック、甘系、カジュアルなものまで

さまざまなロリータ服が売られていた。愛ちゃんは服を次々と手に取り僕に合わせていく。そして気に入ったものを話しかけてきたスタッフに持たせ店内を一回り見終わると僕に試着をさせた。ピンクを基調とした網込みが目立つパフスリーブのワンピース。背中がコルセット状になっており、閉めると体にフィットする。特に飾りの無いクラシックなつくりだ。次にきたのは赤のチェックを基調とした、ノースリーブのワンピース、その日着ていた、黒のブラウスの上にきる。カジュアルなつくりで、胸元に黒いリボンがあしらわれている。愛ちゃんはそれも気に入らない様子だった。5着全てを着終わっても、愛ちゃんの表情は変わらなかった。愛ちゃんは僕が試着室から試着の終わった服を持って出てくると、近くにいた定員にそれを押し付け僕の手を引いて店から出た。しばらく歩くと愛ちゃんは急に止まった。僕は対応に遅れ、愛ちゃんの背中にぶつかつた。愛ちゃんは、僕のほうに振り向くと、「あそこの服は千尋くんに似合わない!!!」と大声で叫んだ。近くにいた人たちは、ちらちらと僕らのほうを見ている。僕は愛ちゃんの耳元に顔を寄せて「そうだね。」と耳打ちした。愛ちゃんは歩き出しながら、「メタモルフオーゼのお洋服は10代の女の子に支持されているけれど、千尋くんには似合わない。」と僕に熱心に説明していた。それから僕たちはもう何軒かラフォーレの地下のお店を回ったりしただけで、結局愛ちゃんのおめがねにかなうものは無かった。

何日かして、愛ちゃんが僕の家で電話をかけてきた。受話器をとると愛ちゃんは、まくし立てるような勢いで、僕に指示を出した。「お洋服いいのみつけたわ。innocent worldのお洋服を買って!!!」

僕はネットでinnocent worldを検索しページを開いた。innocent worldのお洋服はクラシカルな雰囲気だった。柄や、ごく彩色を省き、上品さを売りにしているような服たちは、原宿の地下で見た服たちとは一線を引いている。僕は一通りのお洋

服、靴下、靴、アクセサリを見た後、オレンジを基調とし、ムネ部分を覆うように黒いレースが付いたウィーンの花祭りを連想させるワンピースと、黒の装飾のついたやいシャツ、厚底でラウンドの靴を買った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4392s/>

橋

2011年10月5日13時45分発行